

## 待降節第3主日

福音朗読 マタイ 11・2-11

2022.12.11

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

洗礼者ヨハネは、神様の恵みによって救い主に出会う準備をするように遣わされた、その役割を担った人ですけれども、イエス様が弟子たちを町や村に派遣したり、あるいは人々に教えたり奇跡を行ったり、そういうイエス様のことを聞いて、「ああ、やっぱりこの人が救い主なのかなあ」と思った。でも一方で疑問もある。なぜならば、救い主が到来したのなら、なんで未だに自分は牢屋に入っているのか。あるいは、国は相変わらず回心しない王様とかそういうような者たちに治められている。救い主が到来したけど、でも完全に神の国が実現してないっていう疑問もある。

洗礼者ヨハネの「ああ、この方が救い主なのかなあ。でも自分は相変わらず牢屋に入っているし、完全に救いが実現していない」っていう、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」(マタイ 11・3) というこの間は、やっぱり待ち望んでいる人ならば当然問わざるを得ない、そういうものですね。だから、これは洗礼者ヨハネだけの問いではなくて、むしろマタイの福音書を最初に作り上げていった最初の時代のキリスト信者の共同体も、自分たちは救い主がいらっしゃったって信じているけど、でも相変わらず自分たちが受け入れられないし、迫害される。そういうような、完成とはとても見えない、そういう中を生きていて、絶えず問われている。

自分たちはそれでもイエス様が救い主と信じているけれども、「あなたたちが信じている救い主が来たって言うけど、どうして相変わらず世の中にはいろんなことがあるんですか」と問われる、あるいは「あなたたちの思い通りの国にならないのか」と問われる、そこに絶えず答えなければならぬっていうのがマタイの福音書の共同体、最初のキリスト信者たちの課題だったでしょう。また、わたしたちもやっぱり絶えず「神様がいらっしゃるのならば、どうしてこんな辛い出来事が起こるんですか」と聞かれるわけですね。だから、自分の中に問い続ける問い。それを代表して洗礼者ヨハネが問うていると言えると思います。それに対してイエス様のおっしゃる「救い」っていうのは、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」(マタイ 11・4-5) というものでした。それは、一人ひと

りの現実が変わっていくということです。「死者は生き返り」っていうのも、ただ単に肉体的な死から復活するってことだけじゃなくて、死んだように生きている者がでも希望を見出すっていうことを含めて、もちろんイエス様がなされるしるしの中には死者が生き返るということもありましたけど、でも一人ひとりの現実が変わっていく、そうして、ちょっとずつちょっとずつこの世の中が変わっていくんだというのが神の国の到来の仕方です。救い主が来て、わたしたちのほうの応答には関係なく神様が全部なसारということではないのだ、でも確かに神様の業が始まっている、という、それをイエス様が言いたいんじゃないのかなと思います。

今日は待降節第3主日で、このピンク色の祭服でもいい、紫でもいいんですけど、でもせっかくあるからピンク、それは「喜べ、主は近い」という色です。まだその時は来ていない、クリスマスじゃないけど、でももう近いんだ、というその中に、希望のうちに喜ぶという、それを表わしています。だから、神様の救いは完全に実現していない、でももう既にその中に共に歩んでいる、という、そこに喜びを見出す。見出すっていうのは、見つけようとしなければ見出すことはできません。当たり前みたいに、「ああ、お金が欲しいなあ」と思ってて宝くじに当たるみたいにそういう自動的な喜びとかじゃなくて、いろんな課題があって辛い思いもいっぱいある現実の中に、でも神様がどのように働かれているのかを見出しながら、「あ、そうだな。こういう中に少しずつ神の御業があるよ」ということに気付けたときに、今日の待降節第3主日が表している喜びに出会うことができるっていいんじゃないかなと思います。

ある人が、だいぶもう高齢ですけども、中学生の頃とかは周りの学校とけんかばかりしてた、と。でも自分には、信者だから、信仰があるからやりすぎなかったというようなことをおっしゃる。「え、そんなこと」って思うかもしれませんが、その人が信者じゃなかったら、信仰を親から強制的だったかもしれないけど叩き込まれてなかったら、今頃牢屋に入っていたかもしれません。そういう中に、振り返ってみると、大きな出来事とかすごい大回心ばかりの中に神の業があるんじゃない。小さなことと思えることでも、一回一人ひとりの歩みを振り返ってみるなら、わたしたちも導かれている神様の御旨に出会う喜びを見出すことができるのではないかなと思います。

わたしたちはもちろんまだ完全に救いの実現を目の当たりにしているのではない。個人のレベルでも、世界のレベルでも。それでも、その中にまだ希望があって、救い主がわたしたちと共に苦勞してくださっているのだと、歩んでいるんだということを、そこに希望を新たにして、それぞれの中に喜びを見出す、そういう主日であるように、お互いのために、また一人ひとりの人生を振り返って、そこに表わされる神様の恵み

に気付き、共に喜び合いたい。そういうミサとして今日の主日をお捧げしたいと思  
います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>